



TITLE:

一八八〇年代中葉におけるシャムの の對佛・對清關係

AUTHOR(S):

小泉, 順子

CITATION:

小泉, 順子. 一八八〇年代中葉におけるシャムの對佛・對清關係. 東洋史研究 2011, 70(1): 67-99

ISSUE DATE:

2011-06

URL:

<https://doi.org/10.14989/188954>

RIGHT:

一八八〇年代中葉におけるシヤムの對佛・對清關係

小 泉 順 子

はじめに

- 一 フランスによる援軍派遣要請とシヤム
- 二 清朝による朝貢再開要求とシヤム
- 三 鄭觀應のシヤム訪問
- 四 プリッサダーン親王のみる清佛關係とシヤム
むすびにかえて

はじめに

本稿は、一八八〇年代中葉、清佛戰爭期において、シヤムの爲政者がフランスのみならず近隣諸國との關係を如何に認識し、維持・變更・展開しようとしていたのかという課題を、とくに清朝との關係に着目して検討する。この時期は一般に、ビルマ、ベトナムなどの周邊地域がイギリス、フランスにより植民地化され、その狭間に位置したシヤムに對しても、植民地勢力の脅威が迫った時期として理解される。フランスは、清佛戰爭の勝利の結果、天津條約（一八八五年）によって、一八六七年に植民地化したコーチシナに加えてトンキンを含めたベトナムを統治下に置き、ベトナムとシヤム雙方の「朝貢國」であったラーオの諸王國やカンボジアに對する支配權を主張し、シヤムと對立した。一八九三年には軍事衝突

に至り、フランスはバンコクまで軍艦を遡行して、シヤムに譲歩を迫った。結局シヤムはフランスに降伏し、同年十月に締結された講和條約で、シヤムはメコン川左岸地域と川中の島に關する權利の放棄等を餘儀なくされた。⁽¹⁾ この一件は「パークナム事件」、あるいは「シヤム危機」として知られるが、植民地化の危機に直面して、シヤムでは、司法、教育、軍事、財政、中央・地方行政などの諸側面において、西洋の制度を導入しつつ制度改革が進められ、國王を中心とする中央集權國家體制が整備されていったと理解されている。⁽²⁾

ところで、こうした植民地勢力の動きと並行して、十九世紀後半から二十世紀初頭におけるシヤムの對外關係において重要でありながらも、看過されてきた問題がある。それは清朝との關係である。シヤムは清朝の朝貢國であつたが、一八五二年に派遣した朝貢使節が、歸路暴徒に襲われて死傷者をだしつつ歸國したことから、以來、使節の派遣は中斷され、一八八〇年代半ばに至るまで、清朝から重ねて朝貢再開要請があつたにもかかわらず、それに應じることはなかつた。⁽³⁾ 十九世紀後半、朝貢は、西洋と締結された條約關係と對比され、華夷秩序の下での屬國(huang kin)の象徴であるとする認識が次第に自覺されるようになり、國家間の對等性や王權の權威にかかわり、かつ條約の對等性にも影響を與えるとして問題視されるようになったことが背景にある。

では、中國と條約を締結すればこれらの問題が解決するかといえば、そうではなかつた。なぜならば、條約の締結により、シヤム國內に多數存在した中國人が「外國人」となり、さらには領事裁判權を享受する可能性があつたからである。そうなれば、司法のみならず、徴税や治安の維持など、廣くシヤムの統治の根幹を揺るがすような混亂が生じる恐れもあった。一八八〇年代半ば以降は、條約締結をめぐり、清朝と交渉を重ねるが、シヤムは締結を回避し續けた。ただし朝貢であれ條約であれ、あからさまに拒絶を表明して清朝と對立すれば、國內の中國人が不滿を抱いたり、清朝がシヤム國內の中國人の不滿を煽ったりする可能性も現實問題として深刻にうけとめられ、慎重な對應を餘儀なくされた。種々のチャネルを通じた回避交渉の記録からは、當時シヤム内に數多く存在した中國人移民の動向と相俟つて、清朝の壓力がシヤム

にとつて一つの脅威とみなされ續けていたことがわかる。⁽⁴⁾

したがって、十九世紀後半以降のシヤムの對外關係は、條約を軸とする對英、對佛といった植民地勢力との關係のみならず、中國も含めた近隣諸國・諸地域との關係をも視野に入れて、兩者を相互連關的に檢討する必要性があるように思われる。しかしこれまでシヤムの對外關係はもっぱら歐米との二國間關係を軸とした研究が中心となり、特に清朝とは條約關係がなかったため、朝貢の中斷後の「外交」交渉は檢討の對象とはならなかった。

こうした問題關心から、本稿では、一八八〇年代半ばにおけるシヤムの對外關係認識を、特に清朝との關係を軸にして再檢討を試みる。よく知られるように、ベトナムをめぐり清朝とフランスとの對立が深刻化していった時期、清朝はシヤムがフランスに協力するのではないかと懸念し、鄭觀應を派遣して様子を探らせた。フランスおよび清朝との關係が同時に問題化したこの事件について、鄭觀應の日記からは、シヤムが對佛協力の噂を否定したこと、またそのシヤムに對し、鄭觀應はフランスを挾撃すべく協力を求め、また改めて朝貢を要求したことが知られるものの、シヤム側がこの鄭觀應の訪問をいかにとらえていたのかは、これまで明らかにされてこなかった。他方、フランスとの關係でも、この時期の研究關心の中心は清佛戰爭後の佛領インドシナとの國境畫定や、シヤムがメコン川左岸を「失った」一八九三年のパークナーム事件（シヤム危機）⁽⁵⁾におかれ、清佛戰爭自體への對應は、當事者ではなかったことから、直接檢討されることはないまま今日に至っている。清佛の間におかれたシヤムは、當時の情勢をいかに見通し雙方に對應したのか。こうした研究史上の課題に應えるため、同時代のタイ語史料を檢討したい。

一 フランスによる援軍派遣要請とシヤム

(一) アルマンの提案

一八八三年六月十八日、トンキン政務辯務官に就任することとなった駐シヤム・フランス領事アルマン (Jules Harmand) は、シヤムを去るにあたり、國王チュラーロンコーンに謁見した。そして會見の最後に、「このたびフランスがトンキンを獲得しベトナム (Yuan) を保護下に收めて統治するに至れば、中國側 (la chin) はこれを禁じようとして中國と戦鬪が勃發するだろう」と告げ、トンキンに五〇〇人ほど援軍を派兵して欲しいと内密に要請した。⁽⁶⁾

ここでアルマンがシヤムに對してフランスへの援軍派遣を提案した背景には、當時シヤムと中國とのあいだで朝貢の再開が問題となっていたという事情があり、アルマンは、「以前からの中國との關わりごとを斷つて完全に水に流し」、かつフランスとの關係もより緊密なものとすることができ、シヤムにもフランスにも利益があるよい機會であろうとシヤムを勧誘した。フランスが中國と戦争になれば、イギリスと日本もフランス側につくこと「したがって勝利」は確實であり、戦争終結後に中國と條約を締結することになれば、「タイもそこ⁽⁷⁾に名を連ね、獨立國としてタイの名が條約中にはっきり示される」ことを、フランスを支援してイタリア統一を果たしたとしてサルデーニヤ王國の例も引いて説明した。

この提案に對してチュラーロンコーンは、フランスとの緊密な關係を望む意思を伝え、シヤムにとつてもなにかの利益となるだろうことを認めた。しかし事の重要さに鑑み、諸大臣に諮問する必要性を主張して即答を避け、かつアルマンが提示した二日間の返答の猶豫も間に合わないとして拒否した。

加えて、ならば先にサイゴンに赴任して十五日間待つというアルマンに對し、今度はチュラーロンコーンから、トンキンで中國がフランスと戦うことになれば、ベトナムがつけあがることはないのかと問いかけ、さらに「もし我々がベトナム

ム側を助ければ、我々に多大な利益があると思われる」とも述べた。これに對しアルマンは、ベトナムが蜂起しようともフランスは容易にベトナムを平定することができると自信の程を示し、困難が伴うのは中國に對してのみであらうと述べた。

またこのようにチュラーロンコーンと話したことをサイゴンに報告するというアルマンに對し、チュラーロンコーンは、まずは協議をしなければならず、まだ何か合意したわけではないと念をおした。アルマンも内密の話であり、國王の返信があるまでは何も結論がでないことを確認したうえで、以上は、政府の命令ではなく、「フランスとタイの兩方に利益がある」とみた私見」であり、ただ友好的に勧誘しているに過ぎないと述べてその場を辭した。

(二) シyam側の對應

チュラーロンコーン王は、直ちに王族十二名と大臣四名にこの一件を諮問した。⁽⁸⁾そしてほぼ一週間のうちに四通の上奏書が提出されたが、派兵に賛成したものは皆無であつた。

最初に見解を上奏したのは、カラーホーム卿⁽⁹⁾チャオプラヤー・スラウォンワイヤットピバットサックであつた。六月二十日附の上奏書は、フランスと中國が戰鬪に至るか否かはまだ定かではなく、事態に備えて、王族と官僚の子弟二名ほどを研修の名目でフランスの軍艦に託す案を示し、もし實際に中國とフランスが戰爭となれば、彼らをして狀況を國王に報告させるよう提案した。⁽¹⁰⁾加えて、ベトナムとの關係にも言及し、先に嗣德帝からの遣使がシyam國王に謁見して尊敬の念を示すとともに、シyam側もこれを受け入れて修好關係の回復を確認した経緯に照らせば、フランスに援軍を派遣すればベトナムとの關係に支障をきたすとして、派兵に反對の意を示した。⁽¹¹⁾

續いてその三日後、外務卿チャオプラヤー・パーヌウォン等四名の官僚が、連名で見解を上奏した。⁽¹²⁾四名は、フランスに援軍を派遣すれば、終戦後、締結される條約に獨立國としてシyamの名が記されるというフランス領事の言い分とその

利點は認めたものの、他の得失を勘案すれば損失が勝ると結論づけた。

根據として擧げられた理由の一つは、チャオブラヤー・スラウォンワイヤワットと同様に、かつて敵國であつたベトナムが、禮物を捧持した使節を派遣して修好を請ひ、敬意を表し、これまでの復讐心に終止符が打たれたことがあつた。同時に、中國との關係惡化も懸念された。すなわち、中國と「朝貢再開をめぐって」不和が生じる中、フランスを支援して援軍を派兵すれば、戰爭終結後、中國が力を以てシヤムの派兵を問責し、介入してくる道をひらく恐れがあると考えられた。「そうなれば」フランスが軍艦を派遣して防衛に當たる一方、軍艦を保有し中國周邊海域の防衛に當たつてゐるイギリス、アメリカなど諸大國がフランスから權力を奪おうとして介入することも豫想され、民や商人の間に恐怖と混亂を生じさせることも懸念された。加えて、シヤムの領域内の各地に居住している中國人も、すでに祕密結社にかかわつており、さらにつけあがつて問題を起す恐れも指摘された。

以上から、シヤムが中國の「屬國」(muang khun)ではないと表明するという一點において利は認められても、派兵の結果生じる多岐にわたる問題を考えれば十分ではないとの判斷を下した。

これに對して、すでにシヤムは獨立國であることは明確であるという立場にたちつつ、やはり中國との關係を軸にして、フランスに對する援軍派遣を否定する議論を展開したのは國王の實弟バーヌランシー親王であつた。⁽¹³⁾

親王は、今回フランスがトンキンを獲得してベトナムを統治すれば、これを阻止せんとする中國と戰爭が起きるであらうとしながらも、これを、「以前からの中國との關わりごと」「朝貢」を水に流し、勞少なくしてフランスと親密さを深められる好機」とみなし、シヤムに五〇〇の援軍派兵を要請するアルマンの言い分については、以下の理由をあげて、眞の利益があるとはいえないとした。

まず、中國との關係については、シヤムがすでに中國との關係を斷ち、獨立國であることは明白であり、また大國たる諸外國とも對等な友好關係を結んできたことを指摘した。そして、中國による進貢再開の要請にも斷固抵抗したことは諸

外國の目にも明らかであり、なかには、中國とはすでに關係がなくなり、シヤムは眞の獨立國であることを言葉で表明する國もあることから、そもそも獨立していると考えるべきであると強調した。⁽¹⁴⁾

續けて、今回フランスに援軍を派遣すれば、フランスは本當に中國に勝つであろうから、専ら得るところばかりと思われるが、しかし得られる利は將來の損失に比して十分ではないと懸念を示し、次の問題を指摘した。まず、シヤムと、フランスを支援して參戦するとされたイギリスや日本とを同様に考えることはできないという點であつた。イギリス、日本はともに協力するにふさわしい大國であり、かつ兩國はすでに中國と戦つた經驗があるのに對し、シヤムは、これまで一度も中國とは戰爭に至る争いごとを起こしたことがなかった。この點から生じる損失を考えると、今回フランスに援軍を派遣すれば、いわば史上初めて中國と戦うということに等しく、非常に重大であると考えられた。つまりシヤムが先に戦いをしなければ、すでに進貢をめぐつて問題を抱えているうゑに、さらに恨みをかい、これをさまざま口實に使われて、困難な事態に陥ることは免れないと豫想された。加えてフランスや他の大國たる友好國が、今回のタイのフランス援軍派遣のように、何の利益も得られないにもかかわらずタイを敵から防衛するはずもなく、シヤムの損失になることは確實、だろつとの確信も示している。

こうしてフランスへの援軍派兵に反對する一方でバーヌランシー親王は、ベトナムとの關係にも言及した。まず、先にチュラーロンコーン王がアルマンに對してベトナムを援助することがシヤムの利益となる可能性を示唆したことを引いて、フランスとの友好を損なわない一つの選擇として、ベトナムとの境界域を防衛すべく派兵する可能性について検討した。しかし、陸路で國境地域に派兵すれば大騒ぎとなり、情勢が落ち着かない東方の地方國 (huannuang fai tawanok)⁽¹⁵⁾ においてまた何か事件が起きる可能性もあると判斷し、まずは靜觀し、何か警戒すべきことが突發すれば、シヤムを敵から防衛すべく、兵力を整備・増強するよう提案した。

さらに、知恵才覺に富む人物を高等辯務官としてバンコクから東方の地方國と「朝貢國」(prathetsarat) に派遣して情報

収集にあたらせるか、またはベトナム、クメールとの境界域近くの地方國主や朝貢國王に對して、心して統治にあたるよう教諭す文書を發布するよう提案した。またフランスが中國、ベトナムと戦い、フランスとの間に悶着が生じた結果、ベトナム人やクメール人がシヤム側の領域に逃げこんでくる事態に至れば、事は重大であり、治安を維持し情報収集に努め、バンコクに報告させるように對策を講じる必要性も提案された。そして擧兵して鎮壓すべき事態に至れば出兵すべきだと主張した。

上記のごとき詳細な検討の後、最後にフランスに對する回答案を提案した。「タイ側はフランスを助け、より緊密な友好關係を築きたいと切に願っている」ことを最初に述べたうえで、「今回のトンキンにおけるフランスの戦いはそれほど大きな困難にはみえず、また長引くとも思えない」ことを指摘し、「したがってタイは、ベトナム方面の統治に協力し、もしベトナムがタイと境界を接する地域において何か事件を起こすことになれば、タイは萬事堅固にきちんと措置すること」を言明するというものであった。

パーヌランシー親王が上記上奏書を提出した同じ日（六月二十七日）に、當時マハータイ卿の職にあったマハーマラー親王⁽¹⁶⁾と十名の王弟も、同じく援軍の派兵は多くの損失を招くとした上奏書を連名で提出した。⁽¹⁷⁾

根據として第一に指摘された問題は、ベトナム、中國との關係であった。まず、ベトナム、中國とシヤムは、たとえ相互に修好條約を締結せずとも、これまで敵對したことはないという前提が確認され、「これまで一切約束を破るという罪を犯したことのない」ベトナムと中國に對して危害を加えるべきではなく、またいたずらに民を苦しめるような行爲はなすべきではないと主張された。

次に、今回フランスへの援助は、國王の權威發揚や、國として民にとつても何の益にならないことが指摘された。たとえシヤム軍が活躍したところで、フランスが中國に勝利したのはシヤムの援軍のおかげであると考えられるものは誰一人いるはずもなく、利益はないと斷じた。また、中國との關係においても、シヤムはすでに存分に利益を得ており、兩國の關係

はこれ以上のものを望めないほど良好であるという現状認識に基づき、たとえ最終的に講和條約中に名が刻まれ、中國が「タイを中國に服従する國とはみなさない」と條約中に記すことを認めたとしても、さらなる利益は得られないと考えられた。

第三に指摘された問題は、國王の權威、國益を損なう恐れであった。なぜならば、今回フランスに援軍を派遣し名を連ねたところで、「タイはフランスの權力を恐れ、あるいはフランスの強制に抵抗する勇氣がなかった」と理解されるに違いないからだと述べる。しかもフランス政府は、新聞紙上で、中國の戦争にベトナムが援軍を派遣しないことを根據にして、ベトナムは中國の屬國ではなかったと主張しており、今回フランスに援軍を派遣すれば、アルマンの謀略に乗せられ、シヤムがフランスの屬國であると世界中に示してしまうことになろうと警告した。

また關連して、友好關係の下での戦時における相互扶助ということであれば、ヨーロッパ諸國の例にしたがって、「オフェンシブ・アンド・ディフェンシブ・アライアンス」⁽¹⁸⁾と稱する條約を締結するべきであり、ただ請われて援軍を派遣したのでは、多岐にわたる損失を被るであろうことも、いくつか具體的なポイントをあげて指摘された。そこでは、イギリスが疑念を抱くであろうこと、そして參戰した軍が愚鈍で臆病な様子をせばシヤムの「腕前」が知れ渡ってしまいフランスの態度がさらに大きくなることにも懸念が示された。また中國とフランスが講和條約を締結する場合、フランスが思い通りにその草案を作成するであろうし、シヤムが中國から離れたとしても、フランスにより近づくことになればもつと恐れるべき事態であるとの注意も喚起された。あるいは、さもなくば、中國が（敗北して）シヤムを獨立國とみなせば、他のいずれの國も（現在のシヤムの）友好國と同様に外交使節を派遣してシヤムにおける中國の利益を自らの下に保護し、（中國に）困難を與えるような形で統治を變更させることになれば、恨みや争い、危険を招くことも豫想された。⁽¹⁹⁾

こうして種々の條件を検討した結果、トンキンへの援軍派遣に反對を表明したが、提言はそれにとどまらず、もし本當にフランスがベトナム、中國と一戦を交えることになり、シヤムの領域にも影響が及んだ場合には、これまでの慣行にし

たがって、軍を國境地帯に派遣して防衛にあたる必要があると指摘している。その理由として、東側の境界がベトナム、中國、トンキンの領域と接し、圍まれているため、何も事件が起こらずしても、多數のベトナム人や中國人がフランスから逃れて王國の領域に入ってくる可能性があり、こうした流入者は、食うに困れば強盜と化さざるを得ないことが指摘された。またフランスから逃れてきた人々を、追跡してきたフランスに引き渡さなかったり、國境で追いつ返さなければ、争いの種、非難の的になることも懸念された。さらには國境地域周邊のラーオ人に對して、フランスが扇動して事を起こさせたり、言いがかりをつけたたりすることも考えられ、「慣行に無知で對處の仕方を知らないラーオ人」が騙され、より大きな問題へと擴大する可能性もあった。そこで軍を派遣し、ラーオ人の動向をチェックするとともに、中國人やベトナム人の逃亡流入に備えた國境地域の關門の警備強化を強く提案した。

さらには、國境地域の警備・治安維持のためのバンコクからの派兵は、相互の境界が重なり合いはつきりしない地域において、フランスと國境を分割するに際しても、より明確で確實な證據を示すことになることも指摘した。また、フランスとの文書のやりとりを圓滑にし、かつラーオ人が内緒でフランスの敵に武器や食糧を供與することを阻止し、またフランスの敵が隠れて再び力をつけフランスを攻撃しないよう後方警備にあたることにもなれば、フランスを助けることになることも説明している。

こうして中國であれ、ベトナムであれ、どの國からも咎められない防衛に徹した國境警備のための派兵を提言した。そして、フランスに對する回答としても、拒絶でも受諾でもなく極力協力を表明することとし、シヤム側の軍の動きをフランスに知らせ、問題が生じる可能性があれば協議をするように要請すれば、何か事を生じさせる口實をフランスに與えることもないと言明している。

結局チュラーロンコーンがアルマンにいかなる返信を送ったのか、管見の限り不明である。だが、いずれにせよシヤムの援軍派兵は實現しなかった。⁽²⁰⁾

二 清朝による朝貢再開要求とシヤム

(一) 李鴻章による朝貢再開要求

以上、清佛戦争におけるフランスへの援軍派兵の是非をめぐるシヤム側の議論からは、朝貢関係、假に戦勝國側に名を連ねた場合に豫想される情勢、國內の中國人の動向など、フランス側の提起を受けて、中國との關係に對する影響がさまざまな角度から考慮されたことがわかる。加えて自らの國境地域の治安維持と密接に關係するベトナムとの關係を重視していたことも注目⁽²¹⁾に値しよう。武力による勝敗や條約關係には容易に還元しがたいこれらの要素を勘案しつつ、隣接する地域も含めて自國の安定をはかる道を模索していた様子⁽²²⁾がうかがえる。

それでは實際中國との關係とは、當時いかなる状況であつたのだろうか。

一八五二年に派遣した朝貢使節が、太平天國軍とみられる暴徒に襲われ死傷者をだしつつ歸國して以來、シヤムは清朝に朝貢しなかつたが、このことをして直ちに、シヤム、清朝ともに朝貢關係の終焉と認識していたことを意味するわけではなかつた。清朝側は、その後も治世の變わり目等の機會に朝貢再開を要求し、他方シヤム側もチュラーロンコーン王の即位に際しては、天津經由へ貢道を變更したうえで朝貢の意思が示された。清朝からの要請があるたびにシヤム側では、朝貢使節派遣の得失について眞剣な議論が交わされ、明確な拒否でも受諾でもない返答が模索された。しかしシヤムから要請された天津經由への貢道の變更は認められず、結局朝貢は再開されなかつた。⁽²³⁾

この交渉過程の中で、とりわけ一八七〇年代末から一八八〇年代前半にかけて、中國側の強硬な姿勢がシヤムに脅威を感じさせることになった。シヤムとベトナムを管轄するという廣州の役人 (punkan 本港) による一八八一年から翌年にかけての進貢再開要求は、廣州から派遣された使節に對する歡待やシヤムから送られた文書の形式などについて、シヤム側

の非禮を強く非難し、かつフランス、日本に對抗して、ベトナム、および琉球、朝鮮への軍事的介入も示唆した。しかし、これに對して、シヤム側は書簡の拜受を知らせ、短い返信を送るにとどまった。⁽²³⁾

その後一八八四年五月下旬には、直隸總督・李鴻章の命を受けて、ウン・チョン・ガン (Un Chong Ngan 溫宗彦) と稱する役人から、進貢を催促すべくシヤムを訪問する意思を伝える書簡が届いた。四月二十六日附のその書簡は、五月二十七日にシヤムの對中國關係と中國人コミュニティを司った港務局左部 (Krom Tha Sai) を統括したプラヤー・チョードウツクラヤー・チャーセーティー等によつてタイ語に譯され、翌二十八日、國王に上奏された。⁽²⁴⁾

そこではまず李鴻章の命令の内容が紹介され、暹羅國は二〇〇年餘りにわたり北京の都の朝貢國であり、慣行として進貢しなければならず、敬意を以てそれを遵守してきたが、咸豐帝の治世に至り、國務多忙で通行も亂れ、以降久しく貢を免れることになったと述べられていた。そして、しかしながら、眞誠なる近隣の國々は「進貢を」準備手配すべきであり、慣行はまだ變更されないと指摘し、朝貢を待つ旨が改めて記された。さらに、溫宗彦がシヤムを訪問することが傳えられ、最後に國王および役人に對して慣行を守り朝貢するよう再度促した。

また同じくプラヤー・チョードウツク等によつてタイ語に譯された四月二十六日附の溫宗彦の書簡がもう一通添えられていた。⁽²⁵⁾ その内容は、やはり李鴻章の命令により、咸豐帝の時代に道程に支障が生じて中斷した朝貢の再開を要求するという主旨であつた。そして滞在していた廣州から書簡を送り、まずはシヤムの對應を促していた。

これに對して、シヤム側は溫がいかなる人物であるかを探った。チャオプラヤー・パーヌウォンは、一八六九年および一八八二年に、チークの買い附けのため福建から派遣された使節の中にこの人物が含まれているかを調べ、この中には名前が見当たらないこと、そしてこの二回の使節派遣の目的はチークの買い附けであつて朝貢再開の要求はなされなかったことを確認し、六月二十四日、國王に上奏している。⁽²⁶⁾ ちなみに、李鴻章の朝貢要求を傳えたこの溫宗彦という人物は、一八七九年末に、やはり李鴻章から命じられて、駐シンガポールシヤム領事・陳金鐘を通じてシヤムの中國人に接觸し、輪

船招商局への投資を募った人物であった。⁽²⁷⁾この件は國王に上奏されていたが、⁽²⁸⁾この一件と今回の朝貢要求との関連についてはとくに指摘はなされなかった。

(二) テーワウォン親王とアーネスト・サトウ

他方、當時國王の個人祕書であったテーワウォン親王⁽²⁹⁾は、この李鴻章からの朝貢要求を、駐ヨーロッパ領事としてパリに滞在していたブリッサダーン親王⁽³⁰⁾に送るとともに、六月初めにはこの書簡をもって、當時辯理公使としてバンコクに駐在していたアーネスト・サトウを訪ねた。その様子をサトウは六月二日附の日記に次のように記録している。

午後テワン「テーワウォン」があらかじめ約束してあった面會にきた。彼は中國語の書簡を示してみせた。そこにはかつての朝貢要求が復活されていた。四月二十六日附で五月二十七日に届いたという。彼らは、バンコクの許可なくして軍人が通行することを拒否すべく、警備艇を「チャオプラヤー川河口の」浅瀬に配備し、錨鎖でつなぐという。これは中國の軍艦が到來することを警戒しての豫防措置であった。どうしたらこれを遵守させられるだろうかと訊ねられ、諸國の領事に知らせ、これを本國に伝えるよう要請することだ、と答えた。⁽³¹⁾

その後六月六日にはサトウの方からテーワウォンを訪ねた。テーワウォンは、溫からシヤムの中國人の長に宛てた朝貢を要求する中國語の書簡の寫しをサトウに渡し、またシヤム側からの返信のコピーを英譯後サトウに送ることを約束したという。⁽³²⁾

そして六月十日、サトウはグランヴィルに宛てて、シヤムを朝貢國とみなす上記李鴻章からの書簡の内容を紹介し、中國からの朝貢再開要求とシヤムが中國を軍事的脅威として強く警戒している様子を詳述した。曰く、

これらの書簡の寫しは、國王の私設祕書を務めるテーワウォン親王から私に示された。同時にテーワウォン親王は、シヤム政府はこれまでと同様、進貢であれ、それ以外の條件であれ、完全に對等な條件でなければいかなる交流の再

開も斷固として應じないと述べた。また前回中國使節が訪問した際「二八八一年」、次の要求時には軍艦を派遣すると脅したこと、シヤム政府は彼が砲艦を伴って訪問するのではないかという危惧を抱いていないわけではない。⁽³³⁾

テーワウォンは、「李鴻章が二年前に朝鮮において成功をおさめた政策と同様の政策をシヤムに對して採用したいと考えることもありそうな話である」と考えていたが、シヤムはいかなる威嚇にも強く應じると述べ、また、國王がメナム「チャオブラヤー」川河口の淺瀬沖に軍艦を配置し、いかなる中國の軍艦も通過を拒否する構えであり、さらには河口を入ったところの城砦もあわせれば、どのような威壓にも抵抗できるだろうとサトウに傳えたという。また、現行の諸外國との條約では、軍艦はチャオブラヤー川河口を入ったパークナムで一旦停泊して許可を得てから遡行することを義務付けていたが、シヤム國王はこれを河口の外側の淺瀬で停泊させて許可を求める形に改めたいと希望していることもテーワウォンから傳えられ、グランヴィルに報告されている。⁽³⁴⁾

他方、西洋列強と同じ平等な立場でシヤムと中國が條約を結ぶことについては、中國政府がシヤム國內の約一五〇萬人の中國人にかかわる治外法權を主張する可能性をサトウが指摘したのに對し、テーワウォンは、兩國の慣行はよくにかよつていて、その必要性がないことから、中國は領事裁判權を要求しそうもないとみていたといふ。⁽³⁵⁾

六月十二日、中國の要求に對するシヤム側の返信の草案がサトウに届けられた。サトウ曰く、その文面はそつてなく要點を記すものであったが、翌日、訪ねてきたテーワウォンに對してサトウは中國語の誤りを指摘して返却した。サトウによれば、テーワウォンは、中國への朝貢問題に關して、シヤムは封「investiture」を受けたことはなく、亡くなった前國王が、書簡の中國語譯において貢「tribute」という言葉が使われていたことを一八五七年頃に發見するまでは、贈物「presents」が貢「tribute」とみなされるという認識はなかったと述べたという。このことに加え、朝貢使節のメンバーが太平天國軍によつて殺害されたことにより、シヤムは使節の派遣をやめたと説明したとのことだった。また條約を締結することについては、たとえ領事裁判權を認めずとも、多數の中國人が領事の保護を求め、深刻な危険となりうることを指

摘したサトウに對して、テーフウォンは、中國人の祕密結社は現時點で完全に沈靜しているが、二年前は憂慮すべき事態であつたと指摘したといふ。⁽³⁶⁾

同日サトウがカリ（Sir Philip Currie）に宛てた書簡には、シヤムから中國に宛てた返信の草稿は簡にして要をえたものであると述べられ、また中國からの書簡は、正確な（英）譯を作成させるために香港に送つたことも報告された。さらに中國政府に對してシヤムに介入すべきでないとそれとなく傳えたほうがよくはないかとも問いかけている。⁽³⁷⁾

一連の検討の結果、シヤムは、プラーヤ・チョードウツクから溫に返信を送り（六月十七日附）、シヤムの大臣は中國との友好を望んでいるものの、朝貢については中國側の意に添えないことを傳え、これまでも繰り返し返しその旨指摘したにもかかわらず合意に至ることができず、諸外國と同様に修好使節が派遣されないことに對して遺憾の意を示した。⁽³⁸⁾

三 鄭觀應のシヤム訪問

李鴻章による朝貢要求に對するシヤムからの返信が送られた直後、今度は李鴻章と彭玉麟の命を受けて、シヤムがフランスに援軍を派遣するという噂の眞偽を確認すべく、鄭觀應がシヤムを訪問する。香港からサイゴン、シンガポールを経て、一八八四年六月二十四日、バンコクに到着し、七月五日に發つまで十日間餘り滞在した。⁽³⁹⁾

ちなみにこの鄭觀應の訪問については、鄭觀應が著した『南遊日記』などの史料に基づき、中國史研究者により検討されている。⁽⁴⁰⁾これに對して、シヤム側の記録に基づく研究は、管見の限り皆無と思われる。その背景には、シヤムにおいて鄭觀應は正式な外交使節として扱われず、まとまった形で記録が残されなかったという事情もあるだろう。しかし駐シンガポール・シヤム領事の記録や、バンコクの外務役人の記録、國王への上奏文の中には、斷片的ながらシヤム側の對應を示す史料を見いだすことができる。⁽⁴¹⁾先にフランスの援軍派遣提案に對しては否定的反應であつたが、果たして鄭觀應に對してはどのように對應したのか。シヤム側に殘されるタイ語史料から探してみたい。

一八八四年六月十九日、鄭觀應は、ペー・ゲック・リン (Phae Ngek-Lin 彭玉麟) の書簡一通を携えてシンガポールに到着した。彭の書簡は、一通は駐シンガポール・シヤム領事タン・キム・チェン (Tan Kim Cheng 陳金鐘) に宛て、ベトナム、カンボジア情勢が混乱しているため、鄭觀應を派遣することを伝え、協力の協議を依頼するという内容であった。もう一通は、彭からの密書で、外部勢力がベトナムを併呑し、ブノンペン (金邊) にも迫ろうとしている危機的状況を説明し、隣國であるシヤムに對しても勢力擴大の危険が迫っていることを強調し、警戒と賢明な對應を要請するものであった。そして海域の統治を擔當する立場から、駐シンガポール・シヤム領事である陳金鐘を介して鄭觀應を派遣することを伝え、北京の皇帝の諸國に對する慈愛の念もひきつつ、こうした大事について大臣を召集して對應を協議するようシヤム國王への上申を要請している。⁽⁴³⁾

翌六月二十日、陳金鐘は、外務卿チャオブラヤー・パーヌウォンに宛てて鄭觀應を紹介し、彭玉麟の書簡の内容を要約して伝える書簡をしたため、鄭觀應が携えてきた彭玉麟から陳金鐘に宛てた書簡の寫しとともに、バンコクに向けて出發する鄭觀應に託した。

陳金鐘は、チャオブラヤー・パーヌウォンに宛てたその書簡の中で、鄭觀應を “China Merchants' Steam Navigation Company” [輪船招商局] の “Director” と説明し、訪問の目的を、李鴻章と彭玉麟の命により中國とシヤムとの友好關係に關する調査と記した。また鄭觀應が携えてきた彭玉麟から陳金鐘に宛てた書簡の内容を要約引用し、李鴻章・彭玉麟ともに兩國の懸案事項である朝貢の催促は意圖していないことを明記したうえ、今回の目的はシヤム政府が、依然として中國との友好を望んでいるか否か、およびシヤムがフランス政府と親密でありフランスに協力するという噂の眞偽を確認するためであると説明した。そしてフランスが再び境界について中國を煩わせる可能性があり、ラーオの地方國が中國との境界地域に接しているシヤムとの友好關係を希望している旨が記され、陳金鐘をしてシヤムの眞意を探るようにという彭玉麟の依頼があったことを傳えた。加えて鄭觀應が自らと親しい間柄でバンコクにある陳金鐘の精米所に宿泊する豫定であ

ることを知らせ、また、鄭觀應を李鴻章および彭玉麟のお氣に入りとして、朝貢を要求した溫宗彥と對比させた。そして、陳金鐘自身も、シヤムが中國に對して好意的な姿勢を示すよう強く希望している旨も示された。⁽⁴⁴⁾

またこの書簡とは別に外務卿チャオプラヤー・パーヌウォンに宛てて、鄭觀應を紹介する短い書簡を記し、シヤムと中國との友好關係の調査・確認という目的を繰り返し述べつつ、好人物であることを強調し、丁寧な應對を求めた。⁽⁴⁵⁾

鄭觀應は、これらの書簡を携えて同月二十四日にバンコクに到着した。バンコクでは陳金鐘が所有する精米所に宿泊し、チャオプラヤー・パーヌウォンも、滞在中自由に使用できる車を提供して便宜を圖った。書簡はいずれも、翌二十五日、中國人コミュニティの統治を擔當していた港務局左部 (Krom Tha Sai) の役人によってタイ語に譯され、チャオプラヤー・パーヌウォンに届けられた。⁽⁴⁶⁾

チャオプラヤー・パーヌウォンは、鄭觀應の訪問と彭玉麟および陳金鐘からの書簡の内容を、國王と諸大臣に報告した。これに對して、國王と大臣は、チャオプラヤー・パーヌウォンに「タイ政府は、これまで久しく友好關係を結んできた中國政府に對して、依然親愛の念を抱きつづけている」ことを、陳金鐘に知らせるよう命じたという。⁽⁴⁷⁾ また、彭玉麟が鄭觀應に眞偽を確認させようとしたシヤムがフランスと親密な關係にあるという噂については、フランスと友好關係にあることを認め、中國と一戦を交えるにあたりシヤムに對して協力を求めたことは事實であるとしたが、派兵は次のように否定した。

今回彭玉麟氏が鄭觀應氏を派遣して捜査させた中國において噂されるシヤム王國がフランスと親しいという點についてであるが、シヤム王國がフランスと友好關係にあることは、あなた「陳金鐘」も當然ご存知のことであろう。

今回フランスが中國と一戦を交えんとするにあたり、フランスの對中國戦に協力するようシヤム政府を勧誘するものがあったことは本當だ。しかしシヤム政府は永い間續いてきた中國との友好關係に鑑み、このフランスへの關與協力を受諾しなかった。シヤム政府が望むところは唯一つ、國を治め、商人が安寧幸福を享受し平穩を保てるよう支援す

ることである。シヤム政府は、過去に一度もシヤムに危害を加えたことのないかなる國に對しても、危害を加える意思はない。ただし例外として何者かが危害を加えれば、強固に國を防護することもやむをえない。⁽⁴⁸⁾

陳金鐘は、七月十日、チャオブラヤー・パーヌウォンに返信し、その中で、バンコクからシンガポールにもどってきた鄭觀應に對して、國王の見解も含めてパーヌウォンの書簡の内容を伝え、シヤムが中國に對して常に親愛の情を抱いていることを強調した旨を知らせた。またそれをうけて鄭觀應が彭玉麟に書簡を送ったことをパーヌウォンに報告するとともに、これに對して中國側が如何に考えるかは不明であるとも述べ、フランスと中國との事態が落ち着いたら中國に赴き、その眞意を探るつもりであることを傳えた。⁽⁴⁹⁾

陳金鐘はまた同日附で英文書簡をテーワウォン親王にも送り、鄭觀應が今回のバンコク訪問について陳金鐘に逐一報告し、とりわけテーワウォン親王との會見には満足の様子であったことを傳えると同時に、中國とシヤムとの關係について自らの見解を示した。⁽⁵⁰⁾ すなわち、彭玉麟の命を受けた鄭觀應は、李鴻章に朝貢を要求するよう命じられた溫宗彦と異なり、朝貢要求を目的として來訪したのではないことを再度述べるとともに、鄭觀應自身はシヤムをビルマとともに中國と同盟させることにより兩國を強化し、中國との境界・フロンティア地域の安全を確保したいと考えていたことを指摘した。そしてテーワウォンに對しても中國との關係強化について改めて考えるよう勧めた。

しかしその一方で、鄭觀應が「貢」について言及したことをうけて、陳金鐘は朝貢についてさらに踏みこみ、天津經由であればよしとするのか否かも含めて、シヤム政府の明確な見解の提示も要請している。中國の強い壓力に屈してシヤムが朝貢を再開した場合、シヤムにとっても陳金鐘にとっても恥 (shame) となることを恐れ、シヤム國王の恥、すなわち自らの恥とならない適切な對應ができるよう、近い將來自ら中國を訪れる可能性も示しながら、この問題に對處するためにより具體的な指示と情報提供をテーワウォンに仰いだ。また、單なる善意や友好の表明だけでは十分でないと考えていた陳金鐘は、イギリス、フランスの間におかれ、シヤムの將來のために、中國との友好をないがしろにすることは得策

ではないと主張した。またこの点について鄭觀應とも議論し、鄭觀應もまたシャムとの友好が中國にとって利益になることを認めていたことも伝え、兩國の關係強化を望む言葉を繰り返した。

他方、バンコクからシンガポールに戻った鄭觀應は、ペナンに赴いた後、再び七月二十一日にシンガポールに戻り、翌日テーワウォン親王に書簡を送った。プラヤー・チョードウツクがタイ語に譯したその書簡は、バンコクで會見したテーワウォン親王に對して敬意を表する言葉に始まり、シンガポール到着を報告するとともに、到着後彭玉麟から情報を得たフランスに對する批判が高まる中國の様子を傳えた。またフランスはさらにカンボジアを獲得し、いよいよシャムを攻撃しようとして武器を蓄え準備を進めていると警戒も呼びかけた。サイゴン、トンキン、そしてカンボジアを奪い、ビルマとも通商條約を結ぼうとしていると指摘して、不正不實を働き、飽くなき欲望を追究しようとするフランスを強く批判し、國境を接するシャムにも危険が迫っていると強い危機感を表明した。そして現在は領土爭奪の時代であると述べ、フランスの統治を受け入れることをよしとするか戦うか、シャムが中國の助力を受け入れないとしたらどうなるか、急ぎよく協議するようにと迫り、残るはシャムのみであり、大國の下に入り威風を得て自らの立場を確かにしなければ、周邊小國はヨーロッパ人に奪われ、恐ろしいことになるかと警告した。⁽⁵¹⁾

鄭觀應がフランスの脅威を強く訴える直前、すでに一八八四年七月初めには、シャムにおいてもフランスがカンボジアを領有したというニュースが流れ、その眞偽をバンコクに駐在するフランス領事に確認したところであった。もし本當であれば一八六七年のフランスとの條約違反であるとして危機感を募らせたシャムに對し、フランス領事はこれを否定した⁽⁵²⁾。しかしシャムはその後も、清佛戰爭の狀況の把握に努めると同時に、ベトナム、カンボジアとの境界地域について情報収集を續けた。⁽⁵³⁾

四 プリッサダーン親王のみる清佛關係とシャム

一八八〇年代半ば、パリに駐在して清佛の動向に注目しながら、雙方と接觸・交渉していたシャムの外交官がいた。プリッサダーン親王である。プリッサダーン親王は、「一八七六年に郭嵩憲をロンドンに派遣した中國のむこうをはって」、駐英シャム領事メイスンに代わり最初のタイ人常駐外交代表として一八八一年にロンドンに駐在すべく派遣された人物で、一八八三年以降はヨーロッパ大陸諸國を管轄する公使としてパリに駐在していた。⁽⁵⁴⁾

一八八四年七月十一日、プリッサダーンは、李鴻章が朝貢を要求してきた書簡の寫しを受け取ってテーワウォン親王に宛てた返信で、朝貢要求について、主戦派が權力を握り再びシャムへの壓力を強めようとしていると位置づけ、清佛の争いの展開を追いつつ次のように述べた。

もしタイが堅固に國を統治できれば、中國の進貢催促はまったく憂慮する必要はない。現在中國は他國と戦うに十分な力はないはずだ。またフランスが中國に對して「タイに」進貢を催促するようそのかすことについては、兩者は争いの最中であり、中國と「フランスが」共謀する機會はまだない。中國はフランスを東の國々を抑壓することができる強大國として尊重せず、いまだタイを中國の屬國にしておこうと考え、フランスにタイを獲得させるすきをつくろうとも思っていない。

進貢の問題は、絶対に認めることはできないと考える。力の限り戦うべきだ。中國はわれわれの國にきて戦わねばならないだろうから、對抗可能だろう。⁽⁵⁵⁾

續けて軍備強化について、まだわが國は平穩なので、武器を購入し準備を整える機會があるとも述べ、清佛戦争直前に中國がドイツに戦艦を注文したにもかかわらず、戦闘勃發後ドイツがこれを引き渡そうとしないとして、戦争の勃發、あるいはその噂だけでも武器購入が困難となる可能性があることを指摘しながら、準備を整える必要性を訴えた。⁽⁵⁶⁾

また李・フルニエ協定後再び衝突に至った清佛の争いにも言及し、中國がフランスとの條約を破棄してフランス軍と一戦を交え、フランス人軍人を殺害したことを、シヤムの領域に困難を與えようとした中國をフランスが壊滅させようとしていることは、國王の御威徳であるとも述べている。つまり中國がフランスと再び騒動となることにより、シヤムは外的危険から逃れるために王國を防衛する準備を整える時間ができることから、今回の軍事衝突發生を喜ばしいことと受けとめ、シヤムの敵たる兩國が生死をかけて衝突すれば、國家統治を整備し、兩方の敵から身を守る方策を考え實行することができるとみていた。⁽⁵⁷⁾

その後、フランスが中國と條約を締結してトンキンを保護國にしたうえ、カンボジアも屬國としようとしているというニュースが入り、ブリッサダーンは、ひき續きフランスのカンボジアに對する動きについて情報収集に努めることを七月十八日附書簡でテーワウォンに傳えている。⁽⁵⁸⁾ その一方で、中國との戦いがまだ終結せず、中國の反撃の可能性がある中で、フランスはシヤムを刺激したくないと考えているだろうとも指摘し、さらに、軍備を整えるシヤムの動きは中國に備えたものであるのに、事情を知らないものはフランスを恐れてのこととみているとも述べている。⁽⁵⁹⁾ まもなく、中國からの朝貢要求がそれほど深刻な脅威ではないという知らせがバンコクから届いたが、引き續き周到に軍備を整えるにこしたことはないという見解は變わらなかった。⁽⁶⁰⁾

ブリッサダーンはまた、こうした對中國關係の文脈のなかで日本にも言及し、まずは日本に使節を派遣してヨーロッパ諸國と同様の條約を締結する機會を求め、それから中國と條約を締結しようという國王の考えに賛意を表した。そして、かつてベルリンで會見した日本の公使が、東方の國々はバラバラでまとまろうとしないことと批判したことを紹介しつつ、ヨーロッパに從つて慣習を變更した日本と同じ道を歩むことを勧めた。⁽⁶¹⁾

こうして特に中國を警戒しつつ清佛情勢をパリで追っていたブリッサダーンだったが、十一月半ば、クメールが佛領になる恐れが高まると、フランスに對する危機感を募らせた。そうなれば國內のクメール人もフランスの保護下に入るの

はないか、またクメール人のみならず、タイ人でさえも、公正な待遇が受けられねばフランスの下に入るのではないかと強い懸念を示した。フランスの旗の下におかれることにより利益を得られるとしたら、みなそれを望み、シヤムの統治者は多大な困難に直面することが豫想された。⁽⁶²⁾そして、とくにシヤムの地で生まれ育ち生活し、その行政組織に所屬してきたタイのクメール人を、フランスが佛の「サブジェクト」としてしまいうことがないようにと強い姿勢を示し、このような問題を回避するためにも公正なる統治の實現を訴えた。⁽⁶³⁾

むすびにかえて

一八八〇年代半ばにおけるシヤムの對佛・對清關係からは、シヤムが、中國との關係、およびベトナムと接する境界地域、そしてシヤム内の中國人コミュニティの安定に、常に強い關心を注いでいた様子が示される。

フランスの援軍派兵要請に對する對應からは、ベトナムと中國との關係は、國內の統治や秩序維持とも直結して無視できない存在であり、むしろフランスに先立ち勘案されるべき存在として位置づけられていたともいえる様が浮かびあがる。フランスは、いわば武力で切り込み、條約で清算するという戰略を以て、歴史的に培われた地域間關係に介入しようとしたといえるが、中國とたとえ朝貢をめぐるごくしゃくしていても、かたや現狀において交易などからの利益が得られ、かたや國內に多數の中國人を抱え続けることを考えれば、混亂を招き、將來へ禍根を残しかねない力ずくの對應は、シヤムにとっては好ましくはなかった。また、ベトナムとの關係修復も、植民地化という文脈において結果論として外交的成果はなかったという評價は可能ではあっても、少なくとも同時代におけるシヤムの認識では、近隣地域の安定を圖る上で現實的な重みをもって受けとめられ、對佛交渉にあたつて一つの根據を提供していた。

かといって、シヤムが中國に對してより積極的な關係を追及したかといえは、そうではなかった。軍事的介入さえ伴い兼ねない清朝からの朝貢再開要求は脅威としてうけとめられた。そして、斷固拒否する方針が示されながらも、表向きは

明確な拒絶の表明ではなく、友好関係の強調という形で對應せざるをえなかった。またこうした壓力の前には、條約の締結や軍事協力に對しても警戒せざるをえず、むしろイギリスを巻き込みつつ中國の壓力に對應しようとしていたようすもうかがわれる。

加えて、こうした中、シヤム・中國共に複数のチャネルを活用して、接觸・交渉を試みている點にも着目したい。溫も鄭も、李鴻章がその設立以來深く関わっていた招商局に所屬しており、李鴻章は政治的チャネル（朝貢）と經濟的チャネルを、使い分け、あるいは重ねあわせながら、對シヤム交渉を試みようとしたとも考えられる。これに對してシヤム側も、駐シンガポール領事・陳金鐘を介在させ、情報収集と交渉にあたらせるなど、中國人の交易チャネルを利用した一方、こうした介在者自身の判斷や交渉の餘地も大きかったと思われる。

さらにこうした狀況において、清佛の對立は、シヤムにとつて歓迎すべきチャンスともみなされ、軍備の強化など國內の統治改革が積極的に提案された。このような中國の朝貢要求と砲艦外交の恐れに備えて軍備を増強しようとしたシヤムの動きは、専らフランスの脅威を強調してきたこれまでの理解に對する再考の必要性を提起するものとして注目される。

これまで十九世紀後半以降のシヤムの對外關係は、對英、對佛といった植民地勢力の脅威という觀點から二國間關係を軸に検討されてきたが、中國を含めた近隣アジア諸國・諸地域との關係を中心にすえて、そこに對英、對佛關係を位置づけるという視座轉換の必要性が改めて示唆されているのではないだろうか。また、軍備増強など、シヤムにおけるいわゆる「近代國家形成」や「近代化」の動きは、とくに對中國の文脈の中で顯在化したともいうことができ、西洋の影響が、中國の影響を抜きにしては論じられないという問題も、あわせて提起されるように思われる。

註

*史料は次のように略記される。

The National Archives, U.K.

F.O.69: Foreign Office, Political and Other Departments:

General Correspondence before 1906, Siam.

タイ國立公文書館・五世王期文書

N.A.R.V. NK.: Nangsu krabangkhamhun (上奏書).

N.A.R.V. RL-PS.: Krom ratchalekhanukan, Ekkasan yep

lem saraban samut phiset (王孫秘書局特別綴本).

N.A.R.V. KT (L): Ekkasan yep lem krasuang kantang-

prathet (外務省綴本文書)

その他

N.A.SB.:Ekkasan suan bukhon (個人文書).

N.A. KT (L): Ekkasan yep lem krasuang kantangprathet

(外務省綴本文書).

タイ國立圖書館

N.L.CMH.R.V.:Chotmaihet ratchakan thi 5 (五世王期行政

文書).

(一) 19の時期のシヤムとフランスとの関係については、例え

ば Pensri (Suvanij) Duke, *Les relations entre la France et*

la Thaïlande (Siam): au XIX^e siècle d'après les archives des

affaires étrangères (Bangkok: Librairie Chalemit, 1962),

Patrick Tuck, *The French Wolf and the Siamese Lamb: The*

French Threat to Siamese Independence 1858-1907 (Bang-

kok: White Lotus, 1995)等の研究がある。またフランス

イギリスの植民地とシヤムとの間の國境畫定については、

Thongchai Winichakul, *Siam Mapped: A History of the*

Geo-body of a Nation (University of Hawaii Press, 1994)

(邦譯『地圖がつくったタイ——國民國家誕生の歴史』石

井米雄譯、明石書店二〇〇三年)が、これを「失地」と

みなす歴史觀に對して問題を提起する。清佛戰爭の概要に

ついては、さしあたり和田博徳「阮朝中期の清との關係

(一八四〇—一八八五年)——アヘン戰爭から清佛戰爭ま

で」山本達郎編『ベトナム中國關係史——曲氏の拾頭から

清佛戰爭まで』(山川出版社、一九七五年)、坂野正高「邊

境の喪失・その二—清佛戰爭」『近代中國政治外交史——

ヴァスコ・ダ・ガマから五四運動まで』(東京大學出版會、

一九七三年)を參照。

(二) 例えば、拙稿「タイにおける國家開發と民衆」『講座世

界史三 民族と國家——自覺と抵抗』(東京大學出版會、

一九九五年)、『およむ David K. Wyatt, *Thailand: A Short*

History (Chiang Mai: Trarwin Publications, New Haven:

Yale University Press, 1984), pp.190-222, Pasuk

Phongpaichit and Chris Baker, *Thailand: Economy and*

Politics (Oxford University Press, 1995), pp.211-243, 柿

崎一郎『物語タイの歴史——微笑みの國の眞實』(中公新

書、二〇〇七年)、『一三—一三四頁』を參照。

(三) Suebsaeng Promboon, "Sino-Siamese Tributary Re-

- lations, 1282-1853," (Ph.D. thesis, University of Wisconsin, 1971), Sarasin Viraphol, *Tribute and Profit: Sino-Siamese Trade 1652-1853* (Cambridge, Massachusetts: Council on East Asian Studies, Harvard University, 1977).
- (4) 清朝との関係とそれに伴う問題の概要は、拙稿「朝貢」と「條約」のあいだ」『歴史敘述とナショナリズム——タイ近代史批判序説』(東京大學出版會、二〇〇六年)、「朝貢からの「離脱」——シヤムの事例」『岩波講座 東アジア近現代通史 一 東アジア世界の近代 十九世紀』(岩波書店、二〇一〇年)を参照。
- (5) Pensri (Suvanij) Duke-op-ai. Patric Tuck-op-ai. Chandran Jeshurun, *The Contest for Siam, 1889-1902: A Study in Diplomatic Rivalry* (Kuala Lumpur: Penerbit Universiti Kebangsaan Malaysia, 1977).
- (6) N.A.R.V. NK. 26: Ro. thi 645, "Doktoe harmant kong-sun lae kommissaer farangset" (小暦一二四五年七月白分十三日、一八八三年六月十八日)。以下、アルマンとチュラーロンコーンとのやりとりは、この文書に依據している。また、同日附チュラーロンコーン王の執務日誌も参照。Phrabat somdet phrachunlachomklao chaoyuhua (Chulalongkorn, King), *Chetmaiset phraratchakrit raiuan, phat thi 14*, (Cremation volume for Yai Thewakun, [Bangkok]: Orot lae thida nai Somdet Phrachao Boromawongthoe Krom Phraya Thewawongwatoprakan, 1938) p.63.
- (7) 一般に「タイ」は一九三九年以降の正式な國名とされるが、この時代の史料にも「タイ」という言葉はしばしば使われている。ただし本稿はこの用語の検討自体を目的とせず、混乱を避けるため、直接の引用を除き「シヤム」とする。
- (8) N.A.R.V. NK.26: Ro. thi 645, "Doktoe harmant kong-sun lae kommissaer farangset" (小暦一二四五年七月白分十三日、一八八三年六月十八日)。
- (9) Samuha Kalahom. カラーホームは兵部および南部諸地方國の統治を管轄した。その後再編されて國防省に。
- (10) Chaophraya Surawongwairawat-phiphat (以下チャオプラーヤー・スラウオンワイワットと略記)。N.A.R.V. NK.26: Ro. thi 674. チャオプラーヤー・スラウオンワイワットから國王宛上奏書(小暦一二四五年七月白分十五日、一八八三年六月二十日)。
- (11) このベトナムからの使節派遣とは、一八七九年四月に、嗣德帝の國書(phraratchasan)と禮物(khruang ratthanakan)を捧持して、鴻臚寺卿辦理工部參辦商船事務阮仲朴を正使とする修好使節がバンコクを訪問し、これを契機にしてベトナムとの修好を回復した一件を指す。一八三〇年頃に兩國の關係が途絶えて以來、五〇年ぶりに來訪したベトナムからの正式な使節に對して、チュラーロンコーンは謁見の機會を與え、國書と禮物を受領し、歓迎した。そして、サイゴンの佛領コーチシナ總督に、この訪問に應えてシヤムからベトナムへ使節を派遣することが、一

八七四年に締結されたサイゴン條約に抵觸するか打診した。フランス側は當初、ベトナム使節の來訪・受入に對しては、條約とは關わりないとの姿勢を示したものの、後にシヤムからの使節派遣については難色を示した。結局シヤムは、一八八一年十一月、フランスを介して嗣德帝に國書と返禮の品々を贈った。N.A.R.V. NK.1: Ro. thi 191. チャオプラー・パーヌウォン・マハーコーサーティボディ (Chao-phraya Phanwong Mahakosathibodi. 以下チャオプラー・パーヌウォンと略記) から國王宛上奏書 (小曆二四一年六月白分四日、一八七九年四月二十四日) 等の史料に基づく一連の交渉については、*“Western Influences or Chinese Influences?: Diplomatic Negotiations between Siam and Vietnam, 1879-1882.” Proceedings for 2011 SEAS International Conference of Research Clusters: Historical and Cultural Formation of Southeast Asia: External Influences and Indigenization.* (Organized by the Institute for East Asian Studies at Sogang University, 24-25 March 2011), pp.113-130, において發表した。

- (12) N.A.R.V. NK.26: Ro. thi 683. チャオプラー・パーヌウォン・チャオプラー・ボンラテープ (Chaophraya Phonlathep thi Kasetrathibodi)・チャオプラー・モンタラサックタムロン (Chao-phraya Mahintharasak-thamong)・チャオプラー・シーピバットラッタナラーチャコーサーティボディ (Chao-phraya Siphiphat-rattanaratchakosathibodi) から國王宛上奏書 (小曆二二

四五年七月黒分三日、一八八三年六月二十三日)。

- (13) Chaofa Phanurangsi-sawangwong (以下、パーヌランシー親王と略記)。*Ratchasakuntlawong*, (Cremation volume for Sanan Bunyasiriphan, 1969), pp. 56-57. 四世王の第四十五子、チュラーロンコーンの實弟。一八八五年より戦略局長。N.A.R.V. NK.24: Ro. thi 720. パーヌランシー親王から國王宛上奏書 (小曆二四五年七月黒分七日、一八八三年六月二十七日)。パーヌランシー親王の提言は、この文書に依據している。

- (14) ちなみに、ここである獨立國としてタイの立場を認める發言をした國とは、おそらくアメリカのことではないかと思われる。一八八三年三月、アメリカは、シヤムと中國との間の問題に關するアメリカ政府の見解をシヤムに伝えるべく、國務長官から駐シヤム・アメリカ領事に宛て書簡を送り、その内容は、アメリカ領事から、チャオプラー・パーヌウォンに宛てた四月三十日附書簡によりシヤム側に傳えられた。タイ側に残る記録 (書簡のタイ語譯) によれば、ここでアメリカは、シヤムと中國との關係は、シヤムと修好條約を結ぶアメリカおよび諸外國にかかわる事柄であるとみなしたうえで、アメリカ大統領は、シヤム國王を國務上對等であると考え、シヤムが中國の権力下におかれていないことを確信していると表明した。さらに、條約が相互の對等性を意味するという前提から、もし中國がシヤムに介入し、アメリカと對等とされるシヤムの権力を侵害すれば、シヤムの権限を低下させるのみならず、アメリカ

にとつても憂慮すべき点とあるところ見解を示した。
 NA. R.V. NK.23: Ro. thi 207, Mistoe Von E. Halde-
 maen (John A. Halderman) to Chaphraya Phanwong,
 30 April 1883. これに對してチュラーロンコーンは、自
 ら起草し、「國際法」に則つた判斷であることに言及した
 返信を送るようバーヌウォンに命じた。ただし、アメリカ
 が中國に服屬せず獨立國としてシヤムの立場を認めたこと
 に對して感謝の意を表するバーヌウォンからハルダーマン
 に宛てた返信の草稿(日付なし)には、「國際法について言
 及はない。NA. R.V. RL-PS 21: Thi 319 (小曆一二四五
 年六月白分一日、一八八三年五月七日), NA.R.V. NK.23:
 Ro.thi 258.

(15) 一八八〇年代中葉以降、バンコクからラーオ地方國に高
 等辯務官が派遣されて統治にあたるようになり、一八九〇
 年には、ウボンに駐在した「駐東北ラーオ地方國辯務官」、
 ノーンカーイに駐在する「駐北方ラーオ地方國辯務官」、
 およびナコーンラーチャシーマーに駐在する「駐中部ラー
 オ地方國辯務官」と並んで、チャムバーサクに常駐する
 「駐東方ラーオ地方國辯務官」(khaluang pracham
 huamuang lao fai tawan-ok)が任命され、メコン川本支
 流域に存在していたラーオの地方國を、東方、東北、北方、
 中部の地方國に分けてその管轄域を畫したが、ここでは具
 體的な地名等には特に言及がなく、一般にバンコクからみ
 て東方にあたるシヤムとベトナムとの境界域に存在した諸
 地方國をさしていると思われる。Sathian Lailak, *et al*

ed., *Prachum kotmai pracham sok*, vol. 12, pp.118-119,
 Kennon Breazeale, "The Integration of the Lao States
 into the Thai Kingdom," (Ph.D. dissertation, Oxford
 University, 1975), pp.109-149.

(16) マハータイは民部、およびチャオブラヤー川流域中・北
 部、コーラート高原やメコン流域の東北方面の地方國の統
 治を擔當。一八九二年に首都を除く地方統治を司る内務省
 が再編。マホームラー親王は三世王の第六十五子。 *Rat-
 chasakulawong*, pp.30-31. David K. Wyatt, "Family
 Politics in Nineteenth Century Thailand," *Studies in Thai
 History*, (Chiangmai: Silkworm Books, 1994), p.128.

(17) NA.R.V. NK. 24: Ro. thi 741. マハーデーラー親王
 (Mahamala) ̎ チャットウロンラツサミー親王
 (Chatrongsatsami) ̎ ナレートウオーラリット親王
 (Krommanun Naretworari) ̎ ヌチャットプリーチャー
 コーン親王 (Krommanun Pichitprichakon) ̎ アディン
 ンウムデーット親王 (Krommanun Adison-udomdet) ̎
 プータレートタムロンサクク親王 (Krommanun Phut-
 tharethamsongsak) ̎ プラチャック親王 (Krommanun
 Prachaksinlapakhom) ̎ プロムウオラーヌラック親王
 (Krommanun Phromwanurak) ̎ ラーチャサクサ
 モーソーン親王 (Krommanun Ratchaksamoson) ̎
 シータットサンカート親王 (Krommanun Sirithatsang-
 kat) ̎ テーワウォン親王 (Krommanun Thewawongvaro-
 prakan) から國王宛上奏書(小曆一二四五年七月黒分七

日、一八八三年六月二十七日）。名稱は原文署名のまま。

- (18) 攻守同盟。原文（タイ語）中、英語（發音）をそのままタイ文字で表記し、引用符をつけて強調したうえで、丸カッコ内に、相互に戦争に協力する友好條約というタイ語の説明を附す。

- (19) 原文文意に明確でないところがあり、暫定的解釋として示す。

- (20) チャオブラヤー・パースウォンからアルマンに宛てた一八八三年八月二日付書簡中に、利益があるとしてアルマンからチュラーロンコーンに具申した見解について、協議の結果異論が示されたことを、國王がすでに親書で傳えたことを承知する旨が記されるが、この援軍派兵要請に對する回答を示唆しているのではないか。N.A.R.V. KTJ 62.

- (21) フランスによる援軍要請の直前、ベトナムが使節と國書・禮物を送り再び修好關係が回復したことが、派兵を否定する重要な根據として挙げられたが、このことはベトナムとの修好にとどまらず、中國との關係、西洋諸國との關係にもかかわっていたことが、次の國王チュラーロンコーンの見解に示される。すなわち一八七九年四月、ベトナムから使節が到着した直後、チュラーロンコーンは、港務局長「チャオブラヤー・パースウォン」に宛てた書簡の中で、突然の使節の訪問に驚きといぶかりの念を示すと同時に、西洋人たちの間でいらぬ憶測をよばぬよう、廣く人々に開示して、ベトナムとの修好の慣行を理解させるべきであるとの見解を表明している。そうすればフランスの嫉妬や猜

疑を煽ることもなく、さらには、これを舊來の中國との修好にも引例して、これまで中國との修好においても、ベトナムとの修好と同様「對等」に交わってきたということができ、これもまた利益になるだろうと指摘している。そしてベトナムからの使節訪問について、直ちに官報にて公表するよう命じた。N.A.R.V. RL-PS 4: 254. チュラーロンコーンから港務局長（Kromma Tha）宛（小曆二二四一年六月白分五日、一八七九年四月二十五日）。

- (22) 前掲拙稿「朝貢」と「條約」のあいだ」。

- (23) 同右拙稿、一八〇一—一八二頁。タイ國立公文書館では關連史料が多岐のファイルに散在しており、保存状態もよくないため、現時点では断片的な情報しか得られないが、シヤムは引き續きベトナム國境沿いの様子や清朝側の動向を追っている。たとえば一八八三年七月には廣州など各地に數萬の兵が召集されていたことが、テーワウォン親王に傳えられている。NASB.16.11/24. また同年一月には、廣州のフランス領事館員から、清朝のシヤムに對する軍事遠征の可能性について内密に情報収集を試みた様子がうかがわれる。中國が朝貢國に對して以前より積極的に介入しつつある一方、ヨーロッパ諸國は、中國が極東の海と國々を支配するままに放置しないという情報を得ている。N.A.SB.16.4.3/55.

- (24) Phraya Chodukratchasethi. 以下、ブラヤー・チョードゥックと略記。N.A.R.V. NK.35: Ro. th. 623. チャオブラヤー・パースウォンから國王宛上奏文（小曆二二四六

- 年七月白分四日、一八八四年五月二十八日)。N.A.R.V. NK.35: Ro.thi 624. ウン・チョン・ガンからラオ・クン・バーン宛(小暦一二四六年六月白分二日、一八八四年四月二十六日)。
- (25) N.A.R.V. NK. 35: Ro.thi 625. ウン・チョン・ガンからキアン・ヘーン・クンバーン宛 (Khan heng khun ban) (小暦一二四六年六月白分二日、一八八四年四月二十六日)。
- (26) N.A.R.V. NK.35: Ro.thi 849. チャオブラヤー・パースウォンから國王宛上奏文(小暦一二四六年八月白分二日、一八八四年六月二十四日)。
- (27) この招商局の一件に關する史料もシヤム側に残り、別稿で検討する豫定である。
- (28) N.A.R.V. NK.6: Ro.thi 1736. 陳金鐘から國王宛上奏文(一八七九年十二月二十六日)。
- (29) Phrachaoongyathoe Kromamun Thewawongwaropak. 一八七九年に國王の私設祕書 (*praiwet sabritari luang*) に任命され、一八八五年から一九二三年に亡くなるまで外務大臣の職にあった。Sathian Lailak *et al. ed., op.cit.*, vol.10, pp.26-27. *Ratchasakulnawong, op.cit.*, pp.55-56.
- (30) Phaworawongthoe Phraongchao Pritsadang. 以下、プリッサダーン親王と略記。プリッサダーン親王については後述する。
- (31) Nigel Brailey ed., *The Satow Siam Papers: The Private Diaries and Correspondence of Ernest Satow, C.M.G. H.B.M., Minister-Resident, Bangkok, 1885-1888* (Bangkok: The Historical Society under the patronage of H.R.H. Princess Maha Chakri Sirindhorn, 1997), pp.38-39.
- (32) Brailey, *ibid.*, p.39.
- (33) FO.69/89: Satow to Granville (10 June 1884).
- (34) FO.69/89: Satow to Granville (10 June 1884). チャオブラヤー川入口には浅瀬があり、川への出入りにあたり、船は一旦停泊して潮を待つてこれを越える必要があった。パークナムは、チャオブラヤー川を河口から四キロほど(二マイル半)遡行したところに位置し、關所がおかれていた。John Crawford, *Journal of an Embassy to the Courts of Siam and Cochin China* (Oxford in Asia Hardback Reprints. Singapore: Oxford University Press, 1987), p.72 参照。一八五五年に締結されたイギリスとシヤムとの通商修好條約は、その第七條にて、公務以外の場合、英國の軍艦はパークナムで停泊し、船渠で修繕の必要がある場合にはシヤム當局の許可を得てバンコクまで遡行を許されると規定する。Sir John Bowring, *The Kingdom and People of Siam*, with an introduction by David K. Wyatt (Kuala Lumpur: Oxford University Press, 1969) vol.2, p.219. つかしサトゥは、それが形骸化したままの實態を指摘する。
- (35) FO.69/89: Satow to Granville (10 June 1884).
- (36) Brailey, *op.cit.*, pp.41-42.
- (37) Brailey, *op.cit.*, p.40. ちや、シヤムはサトゥの英譯版か

らも再びタイ語譯を作成している。N.A.R.V. NK. 35: Ro. thi 627. Plae khwam nangsu chin tam yang thi mittoe sautao plae pen angkrit ma.

- (38) N.A. KT (L) 1: 214-216. サトウからグランヴィルに宛てた同年六月二十七日附書簡によれば、シヤム政府は、確かな筋から、直隸總督の指示に基づきシヤムに朝貢の再開を要求する溫宗彦の書簡は、中國政府の裁可を得たものではなく、注目を浴びようという溫の過剰な熱意と野心によるものであったという情報を得たとしている。また中國政府には對等な條約締結の意思はなく、従ってシヤムに居住する多數の中國人に對する治外法權の行使は、少なくとも當該時點では豫期されなことを確認したとする。

FO.69/89; Satow to Granville (27 June 1884).

- (39) 鄭觀應「南遊日記」夏東元編『鄭觀應集』上册(上海: 上海人民出版社、一九八二年)、九五四—九六三頁。

- (40) 茂木敏夫「近代中國のアジア觀」光緒初期、洋務知識人の見た「南洋」『中國哲學研究』第二號、一九九〇年、一〇八—一二頁、濱下武志「近代中國の國際的契機——朝貢貿易システムと近代アジア」(東京大學出版會、一九九〇年)、一三五—二四二頁、餘定邦「一八五二—一八九〇年的中泰交往」『中山大學學報(社會科學版)』一九九二年第三期、五八—六五頁、吉澤誠一郎『清朝と近代世界十九世紀』(シリーズ中國近代史①)(岩波新書、二〇〇一年)、二〇一—二〇五頁。

- (41) 鄭觀應の名は、タイ語文書中にタイ(またはテー)・グ

アン・エーン (Tai/Thai/Tae Nguan Eng) と記される。

- (42) シヤム國王より與えられた當時の欽賜名は Phraya Atsalongkhotthiraksa-sayam phrachanukunthi (以下、フラーヤー・アッサドンPhraya Atsalong 略記)。陳金鐘については、例えば次の研究があるが、いずれもシヤムの對清關係において陳金鐘が果たした役割についてはふれていない。宮田敏之「シヤム國王のシンガポール・エージェント——陳金鐘 (Tan Kim Ching) のライス・ビジネスをめぐる——」『東南アジア——歴史と文化』三二、二〇〇二年、二七—五六頁。Nathawat Suthisongkhram, *Chivit lae ngan kongsun thai khong Phraya Anukunyanthi Upankasit Sayamrat (Tan Kim Cheng) Kongsun yenoran thai khon rae na muang singhapo*, (Bangkok: Rungruang-san Kanphim, 1982). おりしも陳金鐘は「五月半ば、半年ほど中國に滞在する旨をチャオプラヤー・パーヌウォンに伝え、チャオプラヤー・パーヌウォンから、陳も知るところの中國とシヤムとの間の問題について中國政府の意向を探るよう依頼されたところであった」。N.A. R.V. KT(L) 52: No. 304. チャオプラヤー・パーヌウォンからフラー・アッサドン(陳金鐘)宛 (2 June 1884)。

- (43) N.A.R.V. KT (L) 52: No.310. ベー・ゲック・リンからキム・チェン(金鐘)(光緒十年五月二十六日)、およびN.A.R.V. KT (L) 52: No.311. “Nangsu lap” (密書)(光緒十年五月初一日)。なお、タイ國立公文書館に所藏される駐シンガポール領事關係のファイルに残るこれらの書簡は、

いずれもバンコクで譯されたタイ語版である。

- (44) N.A.R.V. KT (L) 52: No.309. プラヤー・アッサドンからチャオプラヤー・パーヌウォン宛（一八八四年六月二十日）。
- (45) N.A.R.V. KT (L) 52: No.312. プラヤー・アッサドンからチャオプラヤー・パーヌウォン宛（一八八四年六月二十日）。
- (46) N.A.R.V. NK.35: Ro.thi 889. いずれもブラ・サワットワームディット (Phra Sawadivandit) が六月二十五日に譯出した。彭玉麟の書簡（陳金鐘宛）（光緒十年五月二十六日）、および『Nangsu Lap』（光緒十年五月初一日）。
- (47) N.A.R.V. KT(L) 52: No.314. チャオプラヤー・パーヌウォンからプラヤー・アッサドン宛（一八八四年六月二十八日）。他方、チュラーロンコーンの執務日誌では、六月二十六日、チャオプラヤー・パーヌウォンから、鄭觀應について、何も用事はなく、シンガポールに到着したついでに訪問したにすぎないとの報告を受けている。また中國人軍司令官から陳金鐘に宛てた書簡に、シャムがフランスと協力するのではないかと中國が危機感を抱き、鄭觀應を派遣し、シンガポールで情報を探った後、バンコクで調査を希望したと記されていたことも伝えられた。Phrabat somdet phrachunlachonklao chaoyuhua (Chulalongkorn, King), *Chotmaihet phrarachakitt raivun, phak 17* (Crema-tion volume for Phrachao Boromawongthoe Phraong Chao Phitsamaphimonasat, 1938), p.107.
- (48) N.A.R.V. KT(L) 52: No.314. チャオプラヤー・パーヌウォンからプラヤー・アッサドン宛（一八八四年六月二十八日）。アーネスト・サトウは、六月二十六日附日記にて、鄭觀應について言及し、李鴻章と彭（？）によってシャムとフランスとの間に密約が存在するか否かを明らかにすべく派遣されたこと、またアルマンが五〇〇の軍勢を提供するよう強く要請したにもかかわらず、國王はこれを拒否したことを記す。Brailey, *op.cit.*, p.45.
- (49) N.A.R.V. KT (L) 52: No.319. プラヤー・アッサドンからチャオプラヤー・パーヌウォン宛（一八八四年七月十日）。
- (50) N.A.S.B.16.13.2/14: T. Kimcheng to Prince Krommum Devawongvarophrakan (10 July 1884). 「暹國王弟利云王沙」はテーワウォン親王を指す。この書簡は、一部傷みが激しく読み取れない。なお、鄭觀應が『Kronatah』との會見には満足していなかったことも記されているが、些細なこととして具體的な説明を避けている。
- (51) N.A.R.V. NK.37: Ro.thi 1529. 鄭觀應からテーワウォン宛（光緒十年六月初一日、小曆二四六六年八月黒分十五日）。『南遊日記』には、七月二十一日に利云王沙に書簡を送り、フランス討伐について協力の可能性を尋ねたことが記される。鄭觀應 前掲「南遊日記」、九七一頁。
- (52) N.A. KT (L) 21/27: チャオプラヤー・パーヌウォンから國王宛上奏書（小曆二四六六年八月白分十三日、一八八四年七月五日）。

- (53) 例えば N.A.R.V. NK 41:Ro.thi 2762. プラ・サヤム トゥラーヌラックからチャオプラヤー・パースウォン（一八八四年十月十日）。また「（チーン・）ホー」と称される中国人の賊（黒旗軍等）の動向についても情報収集している。ホーに對するシャムの反應については、例えば、Kennon Breazeale and Snit Smukan, *A Culture in Search of Survival: The Phuan of Thailand and Laos* (New Haven: Yale Center for Southeast Asia Studies, 1988)を参照。
- (54) Nigel Brailey, *Two Views of Siam on the Eve of the Chakri Reformation: Comments by Robert Laurie Morant and Prince Pitsadang* (Arran, Scotland: Kiscadale Publications, 1989), p.14. 三世王の孫（側室との息子チュムサーイ親王の息子）として一八五二年に生まれ、シンガポールのラッフルズ・カレッジで教育を受けた後、ロンドンのキングズ・カレッジで工學を學んだ。Brailey, *ibid.* pp. 11-19. *Pratut yo Nai phan ek phiset Phraworawongthoe Phraongchao Pitsadang*. Cremation volume. Phim khun mai phua pen anuson nai ngan phratchathan phloeng sop Luang Anekniyawathi (M.R.W. Nat Chumsai) (Bangkok: Niyom Withaya, 1970). 條約關係は領事の駐在を伴ったが、一八五〇年代以降歐米諸國と條約を締結した當初、シャムは現地の歐米人を領事等に任命した。本格的にシャムから領事を派遣するのは一八八〇年代に入ってから、獨立國としての認知を意識しての動きと思われる。一八七九年、イギリス總領事としてバンコクに駐在していたバルグラブ (Palgrave) は、中國、日本など、イギリスと友好關係にある他の獨立國と同様、シャムもイギリスに駐在する外交使節團を設置して兩國の關係を強化したいというシャムの希望に理解を示し、中國や日本と對等な獨立國であることを明確に示して中國との懸案事項を解消するものと歓迎した。NL.CHM. R.V. 10/2.
- (55) ブリッサダーンからテーフウォン宛（一八八四年七月十一日）Pitsadang, Phaworawongthoe Phraongchao. *Pramun chomai khong Phraworawongthoe Phraongchao Pitsadang, ratchabut khomrak khong thai pracham tharwip ywop. M.L. Mani Chumsai khalok chak khong doem* (Bangkok: Khana kammakan chama prawattisat thai lae chat-phim ekkasan thang prawattisat lae boranakhadi, san-nak lekhatikan nayok rathamontri, 1991), p.96.
- (56) ブリッサダーンからテーフウォン宛（一八八四年七月十一日）Pitsadang, *ibid.*
- (57) ブリッサダーンからテーフウォン宛（一八八四年七月十一日）Pitsadang, *op.cit.*, p.95.
- (58) ブリッサダーンからテーフウォン宛（一八八四年七月十八日）Pitsadang, *op.cit.*, pp.99-100.
- (59) 同右。パッティエは「これを「中國の脅し」に對抗する動きというよりは、フランスに對する防衛準備を覆い隠す口實とみなしている。Noel Alfred Batye, "The Military, Government and Society in Siam, 1868-1910: Politics and Military Reform during the Reign of King Chula-

- longkorn.” (Ph.D. dissertation, Cornell University, 1974), pp.261-263.
- (60) プリッサダーンからテーワウォン宛（一八八四年八月二日）Pritsadang, *op.cit.*, pp. 109-110.
- (61) プリッサダーンからテーワウォン宛（一八八四年十一月十四日）Pritsadang, *op.cit.*, pp. 163-164.
- (62) プリッサダーンからテーワウォン宛（一八八四年十一月二十一日）Pritsadang, *op.cit.*, pp.170-171.
- (63) プリッサダーンからテーワウォン宛（一八八四年十一月二十八日）Pritsadang, *op.cit.*, pp.178-180.「サブジェク

ト」は、條約により領事裁判權を享受するものを指す。史料中、英語の音をタイ文字で表記している。なお、まもなく一八八五年一月、プリッサダーンを中心とする王族とヨーロッパに滞在する役人が、王國の制度改變實施に關する上奏書を國王に提出した。植民地化の危機に對して國內の統治制度の改革を訴えたとして知られるこの上奏書は、上に示されるクメール人のフランス保護民化や中國の脅威といった文脈にも照らしながら再検討される必要があると思われる。

the Gobi Desert from the close of the 7th century to the beginnings of the 8th. It is thought, moreover, that the military activity and rule of the mixed nomadic and agricultural area of the Türks of the time was first made possible by securing the Mongol steppe north of the Gobi Desert in addition to securing the stronghold of Qara qum in the Yinshan Mountains. The historical significance of the revival of the Türks of this mixed area lies in the fact that they expanded their power beyond the Gobi Desert into the steppes of Central Eurasia and were further able to expand their territory in Eastern and Northern Asia. Then, if one considers Chinese and East Asian history thereafter, one realizes that the revival and development of the Türk Qayanate was without doubt directly connected to the rebellion of An Lushan that destroyed the Tang system of defense on its northern borders.

THE DIPLOMATIC RELATIONS OF SIAM WITH FRANCE AND QING CHINA IN THE MID-1880S

KOIZUMI Junko

This study examines the question of how Siam viewed, maintained, and attempted to alter and further develop relations with both France and Siam's neighboring countries in Asia, in particular China, as revealed through Thai archival records. The mid-1880s and onward is generally regarded as a period of increasing colonial threat for Siam as France and Britain gradually colonized Siam's neighboring countries, such as Burma and Vietnam. But it was also the period in which Siam had to face renewed demands for tribute from Qing China.

Amidst the worsening confrontation between China and France over Vietnam, France secretly proposed that Siam dispatch 500 troops to support France in its expected war against China on the ground that in the event of French victory, Siam would be able to end its tributary relations with Qing China, Siam would then be recognized as a fully independent country, and Siam's relationship with France would become even closer. Suspecting the possible collaboration between Siam and France, Qing China also dispatched Zheng Guanying, who sounded Siam's true intention and suggested a possibility of cooperation between Siam and China.

In response, Siam declined the proposal from France; and Siam did not react

positively to Zheng Guanying's suggestion either, while denying Zheng their possible collaboration with France. There were several concerns behind these responses. Considering the economic benefits from thriving trade with China and the existence of a large number of Chinese communities in Siam, forceful measures as proposed by France might be a source of future trouble. Therefore, it would not be acceptable for Siam, even though its relations with Qing China were strained over the question of the renewal of tribute. Moreover, Siam also feared that its relation with Vietnam, which had just been restored, would also be in trouble again and result in the deterioration of security and order in border areas between Siam and Vietnam. Likewise, Siam, despite a firm determination not to send tribute to China again and thus had started to build up defense against a possible request of tribute from China by force, had to avoid an open refusal of the request for tribute from Qing China in order not to provoke China and Chinese communities in Siam. Therefore, instead, they responded to China's request for tribute by stressing the friendly relations between the two. Faced with these pressures, Siam also tried to bring out favorable conditions for them by approaching Britain.

Existing studies on Siamese diplomatic relations during the latter half of the nineteenth century and onward have emphasized the colonial threat of Western powers. But Siamese responses to France and China in the mid-1880s, as examined in this article, indicate the significance of the relations with neighboring states in Asia, particularly China, and the necessity of shifting the frame of analysis to place Siamese relations with Asia at its center and those with Western powers within the contexts of Asia.

ON THE STRUCTURE OF POWER IN JOSEON FOLLOWING THE PERIOD OF THE KABO REFORM

KASUYA Ken'ichi

The aim of this article is to elucidate the changes in the power structure in Joseon during the period from the Kabo Reform (July, 1894) to eve of the Russo-Japanese War (February, 1904).

The author has previously examined the power structure of the Taewongun 大院君 regime and the Min clan 閔氏 regime. The method of analysis involved a